

第7回(2009. 1. 5 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「1月は初夢と七草」

新年、通常は元日の夜か2日の夜見る夢を「初夢」と言うが、昔は七福神が乗った船を宝船の絵と「長き夜の遠(とお)の眠(ねぶ)りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな」という縁起の良い回文(後ろから読んでも同じ文)とを、枕の下に入れて眠ると良い夢を見ると信じられていた。もし悪い夢だったら川に流せば良いのだという、きわめて都合のいいものである。

いつも思うのだが、大晦日の夜はテレビでNHK恒例の「紅白歌合戦」を放映する。それが終わると「行く年、来る年」で必ずどこかのお寺の鐘突きの様子を放映するが、その頃ちょうど小腹が空くから年越しそばでも食べていると、まじめな顔をしたアナウンサーが、突然「明けましておめでとうございます」と出てくる。それを見てから寝るのだが、そうすると眠る前からもう元日なのである。だから元日の朝起きた時にはすでに初夢を見てしまうことになる。それよりも、大晦日に寝ても元日の朝起きる直前に見た夢は初夢ではないのか、などと何となく割り切れないようなちょっと複雑な気持ちで新年早々悩む。まあどうでもいいことだが。

ところで、初夢といえば「一富士、二鷹、三なすび」とよく言われるが、富士山とか鷹はまあ良いとして「なすび」は何でだろう、と首を傾げる人も多い。「なすび」とは野菜のナスのことである。一説によれば、駿河の国で一番の自慢は富士山で、二番目は愛鷹山、そしてナスの値段が非常に高価だったからだという。また、富士山は日本で「無事」につながるし、鷹は賢くて強く高く飛ぶ、茄子は「成し」という成功につながるからだという説もある。おもしろいのは、徳川家康が富士山、鷹狩り、食べ物では茄子が好きだったからだというものである。どうもそんなところが当たっているのかもしれない。だいたい名称というものはけっこういい加減なものが多い。

人名にしても同じで、その昔、武家は長男の名前を太郎、次男を次郎、三男以下は三郎、四郎などと付けたが、11番目以降は余一郎、余次郎、余三郎などと付けた。つまり十指に余るからで、それではあまりだから「余」を「与」とした者もいた。有名な武将には源平合戦で弓の名手とうたわれた那須与一(なすのよいち)がいるが、実際に与一は那須家の11男であった。

子だくさんの町民は、もうこれで生むのはやめようという意味で、生まれてきた子供に止(留)吉、あるいは末吉などという名前を付けたが、世の中は思うようにはいかない。その後も続々と生まれて、終いには捨吉などつけたものだが、子供にとってはまことに迷惑な話である。

1月7日は「人日(じんじつ)の節句」である。季節に応じた食べ物で邪気を祓う中国から来た行事だが、江戸時代では公式行事である五節句(節供)の一つだった。このほかに3月3日の「上巳(じょうし)の節句」、5月5日の「端午の節句」、7月7日の「七夕(しちせき)の節句」、9月9日の「重陽(ちょうよう)の節句」を五節句という。

この日は、「七草粥」を食べる習慣がある。中国では、「七種菜羹」といって、7種類の野菜が入ったスープのような料理を食べて、無病息災を祈る習慣があった。これが日本に入ってきて、7種類の野菜ではなく、米、粟、稗(ひえ)、黍(きび)、みの、胡麻、小豆などの7種の雑穀だったりしたこともあったようである。

小倉百人一首に出てくる「君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪はふりつつ」(光孝天皇:在位 884~887)の若菜とは「春の七草」のことだと言われている。1月7日とはいえ旧暦だから現代では2月中旬のことだが、光孝天皇の時代は現代より寒かっただろうから、雪も今よりもっと多かったと思われる。

七草粥とは、芹(せり)、薺(なずな)、御形(ごぎょう)、繁縷羅(はこべら)、仏の座(ほとけのざ)、菘(すずな)、蘿蔔(すずしろ)の7種類だが、薺は、現在はペンペン草、御形は母子草、繁縷羅ははこべ、仏の座は田平子(たびらこ)、菘は蕪(かぶ)、蘿蔔は大根と言う。仏の座はキク科の植物であり、シソ科のホトケノザとは違うから田平子と言った方が間違いがないようである。

また、「七草粥」と言っているが、古代中国では「七種菜羹」と言っていたように、本来は「七種粥」と表現するのだろう。それに蕪や大根を草と呼ぶのも変だ。

この7種の植物にはそれぞれの薬効があるといわれている。芹や菘は消化に、薺は目や五臓、御形は解熱、繁縷は利尿、仏の座は歯、蘿蔔は胃腸に効能があるといわれている。だから正月のお餅のような重い食事に弱った胃腸を休ませる意味もあったと思われる。また、冬の野菜不足を補うための意味もあったものとも考えられる。

「春の七草」に対して、「秋の七草」というのがある。萩(はぎ)、尾花(おばな)、葛(くず)、撫子(なでしこ)、女郎花(おみなえし)、藤袴(ふじばかま)、桔梗(ききょう)を指すが、秋の七草は、春の七草のように摘んだり食したりするものではない。これも、たとえば萩などは草とはいえないから、やはり7種と書いてナナクサと読むのだろう。

古来より、野山を散策して、これらの植物を眺めて歌を詠んだものだった。古人は、非常に情緒豊かな生活を送っていたといえる。飽食の現代人は、埃や煙が充満した悪い空気の部屋で、薄暗い照明の下に厚い化粧で隠された毒花を相手に、カラオケとやらで大きな口を開けて歌っている。遠からず人類は滅亡するか奇妙な怪物に進化(退化)するかもしれない。

ついでと言っては何だが、お正月はトランプとか花札遊びをするがトランプの絵柄にはそれなりに特別な意味がある。一般的には、スペードは剣を表して王侯貴族を象徴して、ダイヤは貨幣を表して商業を、クラブは棍棒を表して農業を、ハートはイエス・キリストの聖杯を表し、僧侶などの聖職者を、それぞれ象徴しているといわれている。また、キング、クイーン、ジャックには、それぞれにモデルがあって、たとえばスペードのキングは古代イスラエルのダビデ王、ダイヤはジュリアス・シーザー、クラブはアレキサンダー大王、ハートのキングはローマの皇帝シャルマーニュというように、歴史上有名な人物を配している。

トランプは、わが国には西洋から入ってきたものだが、原点は東洋で、インドで使われたタロットという占い具がカードに変化し、ジプシーによってヨーロッパに渡って広まったといわれている。現在のようなトランプになったのは14世紀の後半で、それ以後は図柄、形、枚数、名称がヨーロッパ各国でそれぞれ変化していった、今では非常に変わったトランプが使われているところもある。

花札は、長崎から入ってきた「ウンスンかるた」などの影響を受けて、江戸時代中期に完成したが、一年を12ヶ月に分けて各月ごとに花鳥風月を取り入れた優雅なものである。こういった優雅な花札を博打の道具に使う不届き者がいてよく逮捕される。とんでもない連中だ。

ちなみに、ウンスンかるたはパオ(剣)、オウル(貨幣)、コツ(聖杯)、イス(棒)、グル(巴)の5種類で、絵札はウン(唐人)、スン(七福神)、レイ(王)、カバ(従者)、ソウタ(女王)、ロバイ(竜)の6種類、数は1から9までで、4人ずつ2組に分かれて行うのだというが、現在では遊び方を知っている人はほとんどいない。さすがに何でも知っている雲竹斎も知らないが、花札は1月は松に鶴、以下梅に鶯、桜に幕、藤にホトギス、菖蒲(あやめ)に八つ橋、牡丹に蝶、萩に猪、ススキに月と雁、菊に杯、紅葉に鹿、柳にツバメ(小野道風に蛙)そして12月は桐に鳳凰が描かれている。このように私が花札の絵柄をすらすら言えるのは、実は大きな声では言えないが、その昔有名な博徒の国定忠治が立て籠もったという上州は群馬県赤城山の麓で花札賭博をやって遊んでいたからである。40年も前のことだ。もう時効だ。